
課外授業殺人事件

ゆっきー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

課外授業殺人事件

【Nコード】

N5200Z

【作者名】

ゆっきー

【あらすじ】

合唱コンクール殺人事件で事件を解決した赤谷夏希のストーリー第二弾。夏希のクラスは冬休みに、三泊四日で担任である山上哲平の大学時代の先輩の母親が経営している山荘に行くことになった。その山荘で一人の教師が亡くなる。教師は自殺だと言うが、夏希は他殺だと言い張る。

山荘で受ける授業

冬の冷たい風が駅構内に吹きぬけた。

赤谷夏希は旅行用バッグを持ち、改札を出てクラスメートである原口仁と今竹美夕の待ち合わせ時間までしばし待つ。

しばらくすると、仁と美夕が一緒にやってきた。

「スマン、遅れて…」

「ボクも今来たところだ」

そう言いつつも、二、三分待っただけなのに夏希は寒さでガチガチなのであった。

「今日から課外授業なんてな。楽しみだ」

仁は浮かれながら言う。

「そうか？ オレは行く気なんてねーぞ？」

美夕は若干眠そうな表情をする。

夏希の高校が冬休みに入って二日が経っている。

夏希のクラスは、今日から三泊四日で課外授業に行くことになっている。

なぜ、冬休みに課外授業に行くことになったのかというと、夏希のクラスの担任である山上哲平が提案したのである。

「オレの大学の一コ上の先輩の母親が山荘を経営しているから、課外授業として行ってみようか？」

と、期末テストの二日前のロング・ホームルームで、明るく哲平が言ったのに対し、夏希達は行く気もなく、ちょっとしたブーイングが起こったのである。

しかし、哲平はめげずにこう続けた。

「三泊四日で行きたいと思っているんだ。一日目、二日目はちょっとした勉強をして、三日目は丸一日自由な日、四日目の午前中にパーティーでもやろうって思っているんだ。パーティーをやるからには一人千円ぐらいのプレゼントを持ち寄っていききたい。そう思っている

けどうかな？」

哲平は自分が考えたプランを生徒に伝えた。

しばしの沈黙の間、仁が堰を切ったように、

「いいんじゃない？ 勉強っていつても、真剣に勉強するわけじゃないんだし…」

クラスのみんなに言った。

「行ってみようよ。案外、楽しいかもしれないし…ねっ？」

一人の女子生徒がそう言うのと、他のクラスメートは同意したのだった。

そういうわけで教師は哲平を含め四人と夏希のクラスは、三泊四日で課外授業へと向かうことになったのだ。

夏希達が教室に着くと、すでに哲平が来ていた。

「おはよう！」

「おはようございます」

「原口、両手に花だな」

哲平は仁をからかうように言う。

「うるせーよ」

仁は笑いながら自分の席に着く。

約十分してクラス全員が集まって、今回の課外授業に同伴してくれる教師三人が教室に入ってきた。

夏希は三人の教師のうち一人の教師を見て、げっと思う。

そう思ったのは、夏希だけじゃない。

クラス全員が夏希と同じ事を思っていたのだ。

「今日から三泊四日、課外授業に引率してくれる先生方です」

哲平は三人の教師のほうに目をやった。

そして、三人の教師のうちの一人が教壇に立つ。

風紀担当である玉川洋は、四十代半ばで強面である。

たまに大声を出したりもするので、全校生徒から怖がられているのである。

「今日から四日間、課外授業に行くわけだが、相手の山荘の方に粗

相のないように。まあ、山上先生の先輩の母親が経営しているのだから大丈夫だろうが…」

と、洋はチラリと哲平のほうを見る。

「とにかく、山荘ではトラブルを起こさないように」

洋はそれだけ言うと、教壇を降りた。

同時に教室に設置してある電話が鳴った。

哲平が出ると、ほんの数秒受け答えしたただけですぐに電話を切った。

「観光バスが正門の前に到着したようだ。荷物を持って移動するよ
うに」

哲平は手短に言うと、洋達と一緒に教室を出て行った。

夏希達はゾロゾロと教室から正門へと出ると、観光バスが止まっている前で哲平達を待つ。

「みんな、中に入れ」

息を切らせてやってきた哲平は、夏希達を観光バスへと入れた。

後から洋と残り二人の教師が観光バスに乗り込み、点呼を終えると、観光バスはゆっくりと動き出した。

これから始まる惨劇の舞台へと足を踏み入れることも知らずに…。

高校を出発して二時間半、哲平の先輩である母親が経営する山荘に到着した。

山奥にある山荘は少し不気味であるが、一步中に入ると外観とは全く違い、思ったよりも綺麗である。

下駄箱から右手にある大広間にクラス全員は集められた。

「今日からお世話になる山荘の方だ」

洋は哲平の先輩のほうを見た。

「僕は山上の大学時代の先輩の和田良夫です。普段は会社勤めをしていて、別のところに住んでいます。たまに母の手伝いをしています」

良夫は爽やかな笑顔で自己紹介をした。

「私はこの山荘のオーナーの和田悦子で、良夫の母親です。今日は山荘を利用していただきありがとうございます。これから四日間みなさんを快適に過ごせるように努力していきますので、よろしくお願いします」

悦子は穏やかな口調で言った。

「私は良夫の妻の雅美です。困ったことがあればなんでも言って下さいね」

雅美は手短く自己紹介した。

「とりあえず、今から十三時まで昼休みだ。それから二階にある百合部屋という学習部屋に來い。時間厳守だ。いいな!？」

洋はいつもより大きな声で夏希達に伝えた。

昼休みが終わって洋が言っていた百合部屋へと集まった夏希のクラスは、自分達の好きな席に座り、先生を待っていた。

しばらく待つと、市田マリンが入ってきた。

マリンは日本人とポルトガル人の母のハーフで、日本の学校にポルトガルのを教えるに來ているのだ。

マリンが夏希の学校に來て、二年目になるが男子には大人気で、可愛く、という声が多数で、仁もその一人だ。

しかし、マリンが教えているのは二年だけの為、普段、夏希達は接

することがない。

今回、初めてマリんに間近に会い、授業を受けるのだ。

男子がソワソワする中、マリンが百合部屋に入ってきた。

モデル並みの身長に、胸元まであるストレートの黒髪のマリンは、夏希達の前に立つと軽く会釈をした。

「はじめまして。みんなも知っていると思うけど、私は日本人とポルトガル人のハーフです。今日はみんなにポルトガルの事を知ってもらうために、簡単な授業をしたいと思います」

マリンは全員の顔を見ながら言う。

（なんだ：日本語か…。ポルトガル語で話すのかと思った）

内心、ドキドキしていた夏希はホッとした。

マリンは一枚のプリントを全員に配る。

「話は難しくなるけど、詳しくはまた二年になったら話すので、今日軽く聞き流す程度で大丈夫です」

マリンはキリッした表情で、ポルトガルの事について話す体勢になった。

「まずはポルトガル語圏の多様性について話したいと思います。この数年、色々な変化の兆しが見えてきました。歴史上の興味は別に、日本ではポルトガルの関心は低かったのに、日本人観光客やビジネス機会の増加などのせいか、ポルトガルの関心からポルトガル語を学びたいという人が増えているそうです。実際、私が教えているクラスの中にも何人かポルトガル語をもっと学びたいという生徒がいるんです」

マリンはポルトガル語に興味を持ってくれた生徒がいてくれる事が嬉しいのか、少し声が弾んだ。

（ポルトガル語かあ…。英語以外の語学もいいかもな）

夏希は頬杖をついて思っていた。

「日本を中心とした世界地図では、ポルトガル語圏の存在を実感しにくいかもしれませんが、欧米のもので大西洋を中心とした世界地図を見ると、ポルトガル語圏はまさに大西洋を中心とした広

がりを持つことがよくわかります」

マリンは地図を見ながら説明する。

クラス全員、特に男子は真剣に聞き、マリンの話をルーズリーフなどに書いている。

「今からブラジルポルトガル語とポルトガルのポルトガル語を聞いてもらいたいと思います」

マリンはCDを取り出して、CDラジカセに入れて、約五分間、CDを聴くことになった。

「どうですか？ 二つのポルトガル語の違いがあるのに気付きましたか？」

マリンの問いに、ちゃんと頷く夏希達。

「異なる言語のように聞こえますが、これは学習していけば慣れてきます。ただ、発音上感じては初めて学習する人にとっては難点の一つとなるでしょう。その理由は、現代ポルトガルの発音では、アクセントのない音節の母音が極端に弱化するという傾向があるからです。もし、これからポルトガル語を習いたいと思う人がいれば、ブラジルポルトガル語を基礎から学習し、それからポルトガルの発音をしていくのがオススメです」

と、マリンはアドバイスした。

「ポルトガルの魅力ってなんですか？」

一人の女子生徒が、手を上げてマリんに質問をする。

「そうねえ…」

そう呟くと、しばし考え込むマリン。

やがて、何かを思い出したような表情になった。

「マデイラ島っていう島があるわ。年間平均気温が16℃〜23℃で、冬が春を過ぎしにやってくる土地、と言われるくらいなんです。‘マデイラ’とは、ポルトガル語で‘樹木’のこと。自然の美しさや雄大さは有名で、険しい峰と深い谷間が続き、その中を段々畑や滝といった眺めが広がり、‘大西洋の真珠’と呼ばれるゆえんです」

マリンの説明を聞いた夏希のクラスは、それぞれに想像を膨らませていた。

「先生は行ったことあるんですか？」

仁はニヤけた表情で聞く。

その表情を見逃さなかった夏希は、

（全く、美人な女性を見ると男はいつも二やけ顔だ）

呆れ返っていた。

「一度だけ、友達と行ったことあるわ。綺麗な風景が忘れられないわ」

マリンは行った時の事を思い出しながら答えた。

「今日はここら辺にして、明日少しだけポルトガル語の発音とか色々やっていききたいと思います」

その時、男子からブーイングが起こったが、マリンがなだめるとすぐに納まった。

十分の休憩が終わると、次の授業が始まった。

次の教師は本村雅史が入ってきた。

雅史は大人しそうな暗い感じで、いかにもアニメフィギュアを集めていますといったオタク系である。夏希達の社会科を教えている。

「今日の授業は、いつも学校でやっている授業とは別の事をしたいと思っている」

雅史はボソツとした呟くと、ホワイトボードに授業内容を書いた。

（本村の授業、おもしろくねーんだよなあ…。いつもボソボソ話してて、ヤル気が起きねーんだよな）

頬杖をつきながら、ホワイトボードを見つめて思う夏希。

こう思うのは夏希だけじゃなく、クラス全員がいつも思っている。

雅史はプリントを三枚配り終えたと話し始める。

「今日は法律に触れていきたいと思う。プリントのタイトルどおり、日常生活のアクシデントで、日々、僕らの生活にはたくさんの方のアクシデントがある。そんな日常生活のアクシデントの際、必要とされている法律を話したいと思う」

今回の雅史の授業には、初めて夏希は興味を持った。

というのも、夏希は法律に興味があるからだ。

しかし、興味があるといってもこと細かに詳しく知っているわけではない。

ニュースやドラマなどで法律の事を言っていて、それで知っているぐらいなのだ。

いつも法律について知りたいことが多いのだが、社会化担当で根柢な雅史に聞くのは、どうも気が進まない。

今日、学校の授業とは別で、法律の授業をやるということで、俄然ヤル気を出す夏希。

法律の事ならなんでもいいから知りたいのだ。

夏希は雅史のボソボソ声を懸命に聞き取り、プリントの余白に色々と書き込んでいった。

圧力のある人に立ち向かう強さ

その日の予定が終わり、午後八時半から自由時間が始まり、夏希は美夕と部屋でゆっくりと過ごすことにした。

今回は夏希のクラスだけなので、好きなグループで一部屋という部屋割りになった。

しかし、仁はクラスの仲が良い男子二人と同じ部屋になっている。六畳半の部屋に美夕は寝転び、夏希はカバンの中を片付けていた。この二人以外のクラスメートと哲平は、菖蒲という大きな畳の部屋でDVDを観ている。

夕食中に風呂を入り終えたらDVDを観たらどうだ？という良夫の提案に、夏希と美夕以外のクラスメートは賛成したのだった。

美夕は小声で、

「オレは観る気ないけど、夏希は…？」

そう聞いてきたので、夏希も美夕と同じだと答えたのだった。

二人は夕食を食べ終えたのを皮切りに、

「オレら二人DVDはパス」

と、美夕が立ち上がり食堂を出て行った。

急いで、夏希も美夕の後を追いかけて、部屋に戻ってきたのだ。

「美夕、‘ごちそうさま’、くらいはみんなと言っても良かったんじゃないーか？ 何も、‘パスする’って言って勝手に食堂を出なくても…」

ようやくカバンの片付けを終えた夏希は、カバンのチャックを閉めながら美夕に言う。

「いいんだって。あのままいたら引き止められるだけだったんだから…」

美夕は起き上がりながら答える。

「そりゃあ、そうだけど…」

「オレはあのクラスについていけねーな。波に乗れねーってわけよ」

美夕はそう言うのとあぐらを掻く。

（美夕ってマイペースっていうか、わが道を行くタイプだな）

「ボクラ二人ってクラスで浮いてるよな」

ボソッと呟く夏希に、頷く美夕。

「性同一性障害だからな。こればっかは仕方ねーって…」

「わかってもらえねーこと多いからな。仁だってそうだ。本当は理解してもらっているかどうか…。全て理解してもらうつもりはないんだけどさ」

夏希は切なそうな表情をする。

すると、部屋のドアをノックされた。

夏希がドアを開けると、良夫の妻の雅美が立っていた。

「ちょっといい？」

「ああ…大丈夫です。中どうぞ」

夏希は雅美を部屋の中に入れる。

雅美を部屋に入れると、部屋の中が少し明るくなったようだ。

「山上先生から二人がDVD観ないで部屋にいるって聞いたから、少し気になって来てみたんだ」

二人に明るく話す雅美。

夏希はチラッと美夕を見る。

いらん事ばかり言ってるというふうな表情をしている美夕。

「二人共、クラスで浮いてたりする？」

この質問に答えない二人。

少し気になって聞いてみた雅美は困ってしまう。

「あ、ちょっと、待ってて！」

雅美は何かを思い出すと部屋を出て行く。

（なんか変な人…）

ドアを見つめ思う夏希。

十分するとトレーを持って雅美は部屋に入ってきた。

「お茶でもしましょうよ。紅茶嫌い？」

「そんなことないです」

「オレもだ」

美夕は仕方ないなという態度で答える。

「自分の事、‘オレ’って言うんだね」

雅美はクスッと笑う。

「ボク達性同一性障害なんです」

「それでか？」

「‘それでか’って…？」

首を傾げる美夕。

「主人が山上先生から、うちのクラスの女子二人が男っぽいのがいる’って聞いたもんだから…」

「アイツ、なんだよ？ 口軽い奴だな」

美夕はウザそうに言う。

「クラスのみんなは知ってるの？」

「ああ、もちろん」

「そっか。色々、偏見とかあるでしょ？」

「ええ…まあ、色々…」

夏希は答えると、俯いてしまう。

前の学校で受けた偏見やイジメを思い出してしまったからだ。

「紅茶飲んで。クッキーも良かったらどうぞ」

雅美は笑顔で紅茶とクッキーを二人の前に差し出す。

「どうも」

美夕は遠慮なく紅茶をすすする。

「クッキーは雅美さんが焼いたんですか？」

「ええ…。高校卒業してOLしてたんだけど、どうしても料理の勉強がしたくて、社会人二年目から夜間の料理専門学校に二年通ったの。卒業と共に会社を辞めて、ホテルの調理場で、結婚して妊娠八ヶ月まで働いてたってわけ」

マグカップを両手にして当時のことを話す雅美。

「妊娠八ヶ月まで！？」

ひええっという表情をする夏希。

「妊娠がわかった時はパートで働いてたのよ。朝から六時間、休憩付きでね」

楽しそうに話す雅美をじっと見る夏希。

「二人はいつから性同一性障害だって気付いたの？」

雅美は一番気になることを聞いてみる。

「物心ついた時にはもう…」

「左に同じく」

夏希の後に美夕が答える。

「へえ…そうなんだ」

雅美は何かを考えるように黙ってしまう。

三人の間に沈黙が流れる。

そんな中、再びノック音が部屋に響いた。

次に美夕が出ると、良夫がドアの前にいた。

「オイッ！ 旦那が来たぜ！」

美夕は顔だけを雅美のほうに向けて、良夫が来たことを伝える。

「中入ってきなよ」

雅美は良夫を見て言う。

良夫は頷くと、夏希たちの部屋に入ってくる。

「どうしたのよ？」

「夕食の後片付けが終わってひと段落着いたし…。お袋から雅美が山上の生徒の部屋にいるって聞いたからきたんだ」

「そう。紅茶どうぞ。マグカップ一つ多く持ってきたから…」

雅美はマグカップに紅茶を注ぐと良夫の前に手渡す。

「君達、DVD観なくて良かったのか？」

「大丈夫です。DVD観るより自分達のやりたいことをやってたほうがいいもんで…。ていうか、オレはあのクラスについていきたくねーだ」

美夕は体育座りをして、切なそうに答える。

「ついてきたくなくても二年に上がるまで山上のクラスにいなきやいけないんじゃないかな？」

「そうなんですけど、オレらの学校、三年間クラス替えがなくて、あと二年ちょっとあのクラスにいなきゃ……って思うと気が遠くなる」
よほど、自分のクラスが嫌なのかウンザリした口調になる美夕。

そんな美夕に困った表情を浮かべる良夫と雅美。

しかし、夏希には美夕の気持ちがよくわかるのだ。

転入してきたばかりの頃は、クラスに馴染んでいこうと必死だったのだが、クラスに慣れてしまった今では、あまりクラスにいたくないという気持ちも出てきたのも事実だ。

「でも、夏希がいてくれるから、まだ心強いかな」

美夕は夏希をチラッと見てから言う。

「何かあれば山上に相談しろよ。アイツは生徒に親身になってくれる奴だからな」

良夫は二人に優しく微笑んで言ってくれた。

翌日の午前八時、食堂で朝食をとる夏希のクラスと教師達は、少し眠そうな表情をしている。

昨日の夜、良夫と雅美は午後九時頃まで夏希と美夕の部屋にいた。当の夏希と美夕は、午前二時近くまで起きていたのでだいぶ眠い。

「市田、いねーな」

夏希はマリンの姿を探すが見当たらない。

「さあな。まだ部屋にいるんじゃないか？」

仁は哲平達がいる机のほうを見ながら言う。

「化粧に時間がかかってるのかもな。男子に気に入られようとしてるからスッピンでは出てこれねーんだよ」

仁がマリンを気に入っているのを知っているせいか、美夕は嫌味のように言ってみる。

「なんだよ？ 市田先生はスッピンでも可愛いんだぜ」

仁は得意げになって答える。

「スッピン見たことあんのかよ？」

美夕の鋭い質問に、答えられないでいる仁。

「化粧してる顔とスッピンでは全く違う顔なんだって。市田だって化粧落としたら相当ブサイクかもな」

美夕の皮肉は加速していく。

「そんなこと言うなよー」

仁はふくれっ面になる。

（美夕の言うとおりかもな）

二人のやりとりで面白おかしく笑いながら思う夏希。

「そのうち出てくるだろうけどな」

「そうだな。授業が始まるまでにな」

仁がそう言って朝食を再び食べようとする、悦子が食堂に入ってきて、哲平達の机のもとに向かった。

悦子は何やら話しこんでいる。

夏希は気になりながらも朝食を食べ続けた。

それから、午前九時半、昨日の授業を受けた百合部屋に集まった夏希達一同。

最初の授業の担当は、マリンである。

が、入ってきたのは洋だった。

「この授業は市田先生だったが中止になった。みんな大広間に集まって欲しい」

いつになく洋は神妙な面持ちで言ったため、夏希達はわけがわからずにいた。

「さあ、大広間に移動してくれ」

洋に促がされると、夏希達は急いで百合部屋を出た。

夏希が大広間に集まると、哲平と雅史、悦子達がいた。

全員が座り終わると、哲平が重い口を開いた。

「みんな、よく聞いて欲しい。今朝、市田先生が部屋で亡くなっていた」衝撃的な哲平の告白に、クラス全員が動揺し始めた。

夏希も何かで胸を突かれたような感覚になった。

「今日の授業はなしで、各自部屋で待機しててくれ」

「市田はどうやって亡くなっていたんだよ？」

夏希は普段と変わらない同級生と話しているような口調で、哲平に聞いてみたが、その聞き方が気に入らなかったのか洋はゴホンと咳払いをした。

夏希は慌てる様子もなく、

「市田先生はどうやって亡くなっていたんですか？」と、聞き直した。

「毒物を飲んで自殺していたんだ。遺書はまだみつかっていない。昨日の授業で市田先生の様子がおかしいとかあったら、なんでもいから教えて欲しい」哲平は申し出るが、誰一人として何も答ええない。

「本当に何もないのか？」

何も答えない夏希達に、洋は念を押すように聞いた。

だが、それでも誰も何も答えない。

それもそうだ。

昨日、ほぼ初対面同様に授業を受け、マリンの様子がおかしいところはないかと聞かれると答えられない。

普段のマリンの授業がどんなものかわからないからだ。

生徒の様子を見て、哲平と洋と雅史は何やら相談し始めた。

その隙を見て、夏希は立ち上がりどこかに向かう。

その夏希に気付き、

「オイッ！ 赤谷、どこ行くんのだ？」

哲平は夏希に呼びかける。

「市田の部屋だよ」

ウザそうに答える夏希。

哲平は夏希に近付いてくる。

「まさか、事件だと思ってるんじゃない？」

「そのまさかだよ。でも、まだ行ってみないとわかんねーけどさ」

「そうだけど、もう自殺だと…」

「思い込みがいけねーって…。とりあえず、ボクは行く。市田の部屋はそのままか？」

「今のところは…」

「…ならいい。市田の部屋ってどこだ？」

「鈴蘭っていう二階を上がって左のある部屋だ」

夏希は頷くと歩き出した。

鈴蘭と書かれたマリンの部屋の前へとやって来た夏希。

ドアを開けると、マリンの死体がそのままになっている。

（あれ…？）

マリンの部屋の中を見て何か違和感を覚えた夏希。

そして、ゆっくりと部屋の中に入り、哲平が言っていた見つからない遺書を探すことにした。

ヴィトンの旅行カバンをハンカチタオルを使って開けると、すぐに白い封筒と一冊のノートを見つけた。

（これが遺書ってヤツか…）

開けてみると、三つに折られたワープロで打たれた手紙が入っていて、ノートのほうは日記帳だった。

夏希はワープロ書きの遺書と日記帳を一通り読むと、二つの文面からマリリンが自殺じゃないと察した。

（市田は自殺じゃねーな。それにこの部屋には違和感がある。まあ、ヤマテツ達が気付かなかったってのは仕方ねーけど…）

夏希はワープロ書きの遺書と日記帳を持って、大広間に戻ることにした。

大広間に戻ると、まだクラスメートがいた。

夏希の帰りを待っていたのだ。

「何かあったのか？」

哲平は夏希に声をかけてきた。

「まあな」

意味ありげに笑いながら答える夏希。

「わかった事、全て話してみろ」

洋は腕を組みながら言う。

「市田は自殺していたと言っていたが、毒物入りの入れ物がどこにもないんだ。いくら捨てたといっても、一瞬にして毒物が体内に回ってしまえば、部屋の外に捨てるのは無理だ。飲む前に捨てられるが、誰かに見られる危険を冒してまで毒物が入っていた容器を捨てるのは考えにくい」

夏希はさっきマリンの部屋で見たことをまとめて説明する。

悦子や良夫は驚いた表情を見せている。

「それに、市田が自殺する理由なんて何もない。この日記帳を見てもらえばわかる」

夏希はそう言うのと、哲平達に日記帳を見せた。

教師三人は順に渡しながら日記帳を見る。

「確かに日記帳を見る限りでは自殺の理由なんてないけど、日記帳だけでは…」

雅史はいつものごとくボソツと呟く。

呟くと言っても、夏希に向けて言っているのだ。

「本村の言うとおりで。この日記帳は十月十六日から書かれているが、もう毎日が楽しくて仕方がないという感じの内容が多い。まあ、悩み事も書かれているけど…。市田が来たのって去年だったよな？」

夏希の問いに、頷く哲平。

「恐らく、去年からずっとこんな感じだったんだろう。ワープロ書きの遺書もカバンの中から見つかったよ」

夏希はブレザーの内ポケットに入れておいた遺書を読み上げることにした。

「もうこの仕事は嫌だ。死んでしまいたい’この仕事が楽しいと心底思っているのに、理由もなしに変わることなんておかしい」

「まだ半々ってところだな」

洋は一通り聞くと、夏希の説明を否定も肯定もしない口調で言った。「何もわかっていない。全てがわかればいいんだけど、今のだけではなんとも言いようがない。全く思い上がるのもいい加減にしろ」

洋は夏希をバカにする。

これには夏希だけじゃなく、哲平や雅史もカチンときたようだ。

生徒をバカにしたり否定したりするのは、同じ教師としてどうかと思う行為であるからだ。

「どういう意味で言ってるんだよ？」

夏希は強く言い返す。

「そのままの意味だ。前に校内で起こった事件を自分が解決したからって、なんでも事件にして解決しようとしなくて欲しいもんだ。探偵気取りになって…」

洋はウンザリしたように夏希の事を否定する。

「自殺でも殺人でも人一人亡くなっているんだ。しかも、お前の同僚じゃねーか。胸が痛むとかもう少し仕事がしたかったとか、そういう気持ちはねーのかよ!？」

夏希は哲平や雅史、クラスメートの分の思いを代弁する。

「赤谷、やめるんだ」

哲平は洋に腹が立っていたが、努めて冷静になって夏希をなだめる。だけど、夏希は哲平の制止を振り切り、

「教師として、まず人間としての道徳や気持ちとかを一から学んだほうがいいんじゃないか!？」 人に何かを教える前に、自分が教え

てもらうほうがお似合いだ!!」

夏希は洋に自分の思っている事全て言ってしまう。

「ここまでにしろ、赤谷」

「山上先生も厄介な生徒のクラスを受け持ったな」

洋は哲平にそう伝えると、大広間を出た。

夏希以外は安堵感と夏希よく言ったという雰囲気にも包まれた。

美夕の怒り

夏希達が部屋に戻って、一時間が経った。もう少ししたら昼食の時間になる。

あれから夏希は哲平から注意を受けたが、クラスメートからは、よく言った、との声が上がったのだった。

夏希は美夕と共に部屋の戻ったが、すぐに仁がやってきた。

三人はマリンの話を口にしない。

別の話で気を紛らわせているのだ。

しかし、マリンの事を話をしないと胸がポカンと空いたような感じがしてしまう。

「…なあ、夏希、市田先生って本当に他殺なのか？」

仁は窓の外を見つめながら夏希に聞いてきた。

「今のところは…。ちゃんと調べたわけでもねーし、警察も来てねーからなんとも言えないけどな」

「他殺にしろ自殺にしろ、市田が亡くなった事実が変わらねーけどな」

美夕が仁に向かって言う。

「こんな事になるなら市田先生ともっと話ししておけば良かったなあ…。それに、ポルトガル語だって、もう少し勉強しておきたかったな」

仁は悔しそうに言う。

そんな仁を見ていられなくなる夏希と仁。

「大丈夫だ、仁。ボクがなんとかしてやるよ」

「何とか出来るのかよ…？ 夏希が市田先生を殺害した犯人見つけたって、市田先生は戻ってこねーよ！！」

仁を勇気づけるために言った夏希だったが、逆効果だったようだ。相当、マリンの事が好きだったのが、夏希への怒りになっているのがよくわかる。

「市田は戻ってこねーけど、せめてもの救いにはなるだろ？」

意外にも夏希は冷静でいた。

「救いにもならねーって!!」

「じゃあ、どうしろっていうんだ？　ボクは犯人を挙げる事以外、何も出来ない」

「勝手な事ばっか言うなよ…。オレの想いはどうすれば…」

仁は自分の髪をクシャクシャにしながらぶつけようのない声を出す。

「勝手な事言ってるのはお前だよ」

美夕は呆れ顔で仁に言った。

「まだ他殺だって決まったわけじゃないけど、せっかく夏希が市田を殺害した犯人を探してやろうって言ってるのに、それも嫌だって子供じゃねーかよ。仁が市田の事好きだってのはわかるけど、少しは大人になれよ」

続けて、美夕は言ったが、仁に対して怒っていた。

「苦しいのは仁だけじゃないんだ。ボクらのクラスの男子だって仁と同じだって。男子は市田の事‘可愛い’って言っていたんだからな」

二人の言葉に、仁は我に返ったようになった。

「…わかってる。こんなに苦しいのはオレだけじゃないってのはわかってる。でも、この想いを誰かにぶつけたくなって…。本当にスマン…」

二人に謝る仁に、ホツとした表情を見せた夏希。

だが、美夕はどうにも怒りが収まらなかった。

夏希達のクラスが食堂に集まって昼食を取ることになったが、どこか空気が重い。

それもそのはずなんだが、クラス全員が犯人は誰なのかという疑問が残っている。

夏希を始め全員がマリンは自殺だと思っていたのだが、それを自殺から他殺だと夏希が覆したので、クラスメートや哲平は夏希に期待しているのだ。

警察が判断したわけではっきりしたことはわからないが、クラスメートは夏希が他殺だと判断したのだから間違いないと思っていた。

夏希は仁と美夕と一緒に食堂に入る時に、

「昼に警察が来る予定だ。あまり情報は少ないだろうが、なるべく協力するつもりだ。なんでも言ってくれ」

哲平が夏希の耳元で言ったのだった。

夏希は仁と美夕、仁の友達二人の五人というが、男子は元気がない。特に仁に関しては、男子の誰よりも落ち込んでいるためあまり食が進まない。

仁の仲の良い男子二人と三人で、マリンの数少ない思い出を話している。

昨日の授業も思い出の一つだ。

この話について、特に仁が熱く語っている。

時折、切なそうな表情を見せながらも…。

そんな仁に、余計に苛立つ美夕。

美夕の苛立ちを感じ取っていた夏希は、部屋で言ったような事を仁に言い放たないか心配していた。

「マリン先生の授業、もっと受けたかったよな。たった一回だけなんてな」

「うんうん。ビシバシと指導して欲しかったぜ」

「オレだって。市田先生と仲良くなれないまま亡くなるなんて、最低最悪だよなあ…。あーあ、こんなに好きなのに…」

仁はお茶が入っているコップを見つめる。

「一生、好きな女性現われねーかも…」

仁のその一言に、プツンきた美夕は机を大きく両手でバンツ！と叩いて立ち上がった。

一緒にいた夏希やクラスメートは驚いて美夕のほうを見た。

「お前さ、さっきからなんなんだよ？　口を開けば、市田先生、市田先生、って…。そんなに市田の事が好きなら、市田んところに行けよ！　市田が亡くなった事に文句があるなら犯人に言えよ！！」

美夕は一気に仁に言ってしまう。

呆気にとられた仁だったが、次第にムツとした表情になる。

「なんで、オレばっかに言うんだ？　他の奴らにも言えよな」

「仁の市田に対するノロケが見ててムカツクんだよ。他の男子のほうがマシだ」

美夕は仁の不満をぶつける。

「二人共、とりあえず落ち着けよ。今竹、言い過ぎだぞ」

哲平は美夕と仁の中に入る。

美夕は哲平を睨むと、何も言わずに食堂を出て行った。

（どうしたんだよ？　美夕…。仁に突っかかるなんて美夕らしくねーよ…）

食堂を出て行く美夕の後ろ姿を見つめて、夏希は思っていた。

午後一時、警察がやってきた。

なぜ、早くに通報しなかったのかという問いに、悦子は、生徒の動揺を少なくするため、と答えたのだった。

そして、百合部屋に集められた夏希達が、じっと待っていると瀬川警部と村木巡査長が入ってきたのには、全員驚いたのだった。

一番前に怒りが収まっていないう美夕と座っていた夏希は、

「瀬川警部、管轄外なのにどうしているんだよ？」

目を丸くして聞いた。

「玉川先生からの要請で、ここの管轄の刑事から、赤谷という生徒が山荘に来ている、と言われて、急いで来たんだ」

「そうなんだ…」

（昼食の時にいないと思ったら、玉川の奴そんな事してたのか…）

「ここの所轄の刑事さんは…？」

首を傾げる哲平。

「来てます。今、市田先生の部屋で捜査しています。赤谷さんの事はちゃんと話してますよ」

「そりゃ、どうも…」

「それでは、本題に入ります」

瀬川警部は笑った表情から真面目な表情になった。

「先ほど、玉川先生とこの山荘のオーナーの和田悦子さんからお話を伺ってきました。第一発見者はオーナーで、玉川先生から、市田先生が起きてこないから見てきてほしい、と言われて見に行ったら亡くなっていた、というわけです。そして、今日の午前中に玉川先生は自殺だと言ったところ、赤谷さんが自殺ではないと意見した。そうですね？」

瀬川警部は同意を求めるように、哲平に顔を向けた。

「はい、そうです」

「二人にお話を伺った後に、市田先生の部屋に行きました。まだきつちりと調べていませんが、赤谷さんの言うとおり他殺で間違いないでしょう。赤谷さんは市田先生の部屋に行ったのか？」

「行ったよ」

「何わかったことがあれば教えて欲しい」

瀬川警部の要請に、夏希はわかったというふうに頷いた。

「市田のカバンの中からワープロで書かれた遺書と自筆の日記帳が見つけた。どっちもヤマテツに渡してある」

夏希はそう言うのと、哲平を見た。

「ああ：これです」

哲平はあらかじめ夏希から預かった二つを瀬川警部に渡した。

瀬川警部は二つに目を通す。

「ほう：。日記帳は高校の授業を教えるのが楽しいと書いてあるのに、遺書ではこの仕事が好きだと書いてある。矛盾していますなあ：」

「遺書がワープロ書きっていうのも気になりますね。まあ、自分の家のワープロで打ったという事もありえますが：」

瀬川警部から渡された遺書を見ながら言った村木巡査長。

「市田先生は家にワープロやパソコンは持っていないらしいですよ。おまけに学校は冬休みで校内のコンピュータ室は使用出来ないのので：」

哲平は村木巡査長の言ったことに否定する。

「実家で制作したっていう事も：」

「市田先生の家族はポルトガルに住んでいて、今日本にはいないんです」

哲平の説明に、驚く二人の警官。

「そうなんですか？」

「ええ：。市田先生は日本人とポルトガル人のハーフなんです。市田先生が小学校三年生の時に家族で日本に来たんです。でも、去年、市田先生以外の家族はポルトガルに帰ってしまってます：」

哲平はマリリンから聞いた話を二人の警官に話した。

「どうりで：。親御さんは仕事でポルトガルに：？」

瀬川警部はマリリンがハーフっぽい顔をしていると思っていたのか、納得した表情をした。

「そうみたいです。市田先生はもう少し日本にいたいということで、一人で日本で一人暮らしをしています」

マリリンの事を話す哲平に、首を傾げる村木巡査長は、

「市田先生の事、詳しくないですか？」

少し控えめに質問してきた。

「オレだけじゃなくて、校内の先生なら誰でも知っていますよ。市田先生は全て包み隠さず話す女性でしたし、オレと市田先生は特別な関係ではないですよ」

哲平の答えに、納得のいかない表情を見せた村木巡查長。ちよūdそその時にドアをノックする音が部屋中に響いた。

はい、と返事したのは哲平だ。

部屋に入ってきたのは、背広を着た小柄な男性だった。

「お話のところすいません。瀬川警部、ちよūtと…」

「何かわかりましたか？」

瀬川警部はそう言いながら、所轄の刑事に近付いて、二人は何やら話しこんでいる。

二、三分話をして、前に戻ってきた。

「所轄の刑事がまだ調べている途中なのですが、市田先生は白血病を患っていたようです」

瀬川警部はたった今聞いた事を夏希や哲平に伝えた。

当然、部屋中はどよめいた。

「それ、本当なんですか？」

クラスの女子生徒が聞く。

「ええ…。カバンの奥から薬と診断書が発見されました。年明けの一月十日から入院する予定があったそうです。所轄の刑事が病院に問い合わせをしたそうです。死因ですが、青酸カリで亡くなっていました。一見、自殺と捉えがちですが青酸カリが入っていた容器がどこにも見当たらないそうです」

瀬川警部は所轄の刑事から報告した話を話した。

「そういえば、ボクがさっき市田の部屋に行った時、容器が見当たらなかったな」

夏希は思い出したように瀬川警部に報告した。

「そうか。市田先生の死亡時刻なんですが、昨夜の午後八時から十時半までの間です。みなさんは部屋におられたんですよね？」

瀬川警部は手帳に書き込みながら哲平と生徒に聞く。

「菖蒲という部屋でDVDを観ていました。その二人を除いては……」

哲平は夏希と美夕をチラリと見て答えた。

「二人はDVDを観なかったのかい？」

「ああ：部屋にオーナーの息子と嫁さんの四人で喋ってたよ」

村木巡査長の問いに、美夕が答える。

「なんでまた部屋に……？」

「DVD観る気がなかったからだよ」

「せっかくクラスみんなで来ているのに参加したほうが楽しいんじゃないのかい？」

瀬川警部は美夕の心境がわからないようだ。

「別にいいだろ？　オレらがDVD観ようがどうしようが勝手だろ？　悪いか？」

「いや、悪くはないけど……」

言い返す言葉もない村木巡査長。

「残りの奴らはどうしてたんだよ？」

美夕は自分達の事はいいいから次にいけよと言うふうな口調で、二人の警官に聞いた。

「オーナーは事務所で一人で仕事をしていて、玉川先生と本村先生の二人は牡丹の部屋にいたそうだ。市田先生も一人で部屋にいたそうだ」

村九巡査長は手帳を見ながら答える。

「怪しいのはオーナーだけど、市田先生とは初対面だしなあ……」

哲平は腕組みをして呟く。

「いや、初対面じゃないかもしれねーぜ」

夏希の一言に、えつといく表情をした哲平。

「赤谷、どういうことだ？」

「そのままの意味だよ。市田とオーナーが知り合いだとしたら、何かの理由でオーナーが市田を殺害したとも考えられるだろ？」

夏希はイスに深く座ってマリンと悦子が知り合いかもしれないとい

う理由を述べた。

「しかし、親子ほどの年が離れているのにどこで知り合いになるっていうんだ？」

「それはボクも考えているんだけど、まだわからなくて……」

夏希はそう言うのと、事件の事を考え始めた。

（もし、市田とオーナーが知り合いだとして殺害理由は……？ 例え、オーナーが犯人じゃなくても犯人はボクらの中にいるのは確かだ。もう一度、市田の部屋に行って調べてみる必要があるそうだ）

「市田の部屋に行って何か感じなかったか？」

夏希は二人の警官に聞く。

「ああ……市田先生の部屋の状況だろ？ 家具の位置が変だったな。今までに見たことのない変わった部屋だったな」

瀬川警部が言う。

瀬川警部も夏希と同じ違和感を感じていたようだ。

「元々、そういう家具の配置なんだと思うけど、なんだかしっくりこないんだよね……」

夏希は軽くため息をついてから言う。

「オーナーに部屋の事、聞いたほうがいいかもな」

「そうだな。まだもう少し色々と聞きたい事もあるからな。市田先生はどういう先生でしたか？」

瀬川警部は生徒ではなく哲平に聞いた。

「明るくて優しい先生でしたよ。男子生徒に人気がありました。市田先生に好意を抱いている男性教師もいたみたいですしね」

「先生もその一人ですか？」

村木巡査長は何を考えているのか、不敵な笑みを浮かべて哲平に聞いてきた。

哲平は癪に触ったらしく、ムツとした表情になる。

「違いますよ」

「市田先生と親密な関係ではないですよね？」

「だから、さっきも言いましたけど、市田先生とは特別な仲ではな

「いですよ。オレを疑うのは筋違いですよ」

「イライラしながら答える哲平に、反応する瀬川警部。」

「筋違いっていう事は玉川先生か本村先生を疑えって意味ですか？」

「そういう意味ではないです」

「では、どういう意味で…？」瀬川警部の素早い質問に、怒りをとり越して呆れた表情を見せる哲平。

「まあ、いいでしょう。山上先生には後でじっくりお話を伺いましょう。我々は市田先生の部屋に戻りますが、市田先生の事で何か思い出したなどあったらなんでもいいので包み隠さず言って下さい」瀬川警部は険しい表情で、生徒に伝えた。

哲平が明かしてくれた過去

午後三時半過ぎ、夏希はマリンの部屋へと向かうことにした。

夏希のクラスは一旦解散することになり、自分の部屋に戻るように哲平に指示されたが、夏希だけは後で部屋に来いと言われたのだった。

一方、仁と美夕は一言も口を聞かないまままで夏希はどうしたらいいか考えていた。

事件に友達の事に、次から次へとどうしてこんなにも問題が生じてしまうのかと、夏希はこの山荘に来たことを後悔し始めていた。

山荘に来て二日目でこんなことになるとは思わなかった上に、帰りまでに事件を解決しないといけないという重圧が夏希にのしかかっていた、それだけで気が遠くなってしまう。

前回の事件の事もあり、今回も夏希が事件を解決してくれるという期待がある以上、裏切れないという気持ちがある。

いくら自分がミステリー小説が好きでよく読んでいるとはいえ、現実の事件とはケタが違うし、自分が実際の事件を解決出来るわけがない、とずっと思っていた。

それが前回の事件は悩みながらも解決してしまった。

自分の中にそんな能力がどこにあったのか、性同一性障害以外に自分はどこか他人と違うんじゃないかと疑いたくなる気分だった。

夏希はマリンの部屋に行く途中、渡り廊下から見える景色が目に入ると足を止めて見入ってしまう。

（とんでもないことになった…）

山々を眺めつつ、深いため息をつき事件を解決しようかどうかどうしようか迷っていた。

夏希の中に、警察にまかせておけばいいんじゃないかという思いがあるのも確かである。

それに美夕がなぜあんなにも仁に対して突っかかるのか理由も知り

たいし、理由を聞いた上で二人の仲をなんとか仲直りさせたいのである。

夏希は仁と美夕の存在が大きくなっているのに気付いた自分がいた。マリンの部屋に着くと、警察官が何人かいた。

夏希が少し入りづらそうにしていると、所轄の刑事が一人、夏希に気付いて近付いてきた。

「君が赤谷さんかい？」

背の高い大柄な刑事は、威圧感のある存在の野太い声で夏希に聞いてきた。

「あ、はい、そうです」

いつもは強気な夏希でさえも恐縮してしまう。

「私は吉田です。君の事は瀬川警部から聞いているよ。本来なら、警察しか入れないんだが、瀬川警部の手前、特別に入れたあげよう」

「ありがとうございます」

夏希が礼を言うと、現場に通された。

さっきマリンの部屋に来たが、どうしても家具の配置が気になる。マリンの殺害後に配置を変えてしまったような感じだ。

「大体の事は瀬川警部に聞いていると思うが、犯人はこの山荘の人物か君の学校関係者の線が濃い。まあ、赤谷さんの学校関係者の可能性が高いわけだが、何も殺さなくてもいいのに……」

吉田警部は独り言のように言う。

「瀬川警部から青酸カリで亡くなったって聞きました。容器は見つかっただけでしょうか？」

夏希は吉田警部を見上げて聞く。

さすがに普段の聞き方ではマズイと思い、敬語になってしまう。

「いや、まだなんだ。今のところ、市田先生の部屋しか捜査していないんだ」

「今日は何時頃までこの捜査でするつもりですか？」

「五時で切り上げる予定だ。その間に色々調べておかないとな。」

青酸カリが入っていた容器も今日中に見つけておきたいんだ。警察

がゾロゾロいたら、赤谷さん達生徒からすると居心地が悪いだろうが…」

吉田警部はさっきより幾分柔らかな口調になっている。

「それにしても、部屋の配置がおかしい」

吉田警部は夏希や瀬川警部が感じていた部屋の配置について話す。

「それはボクも思っていました。すごい変な部屋だなーって思っていて…。瀬川警部は後でオーナーに聞いてみるつもりだと言っていましたけど…」

「そういえば、そんなこと言っていたな。今、再度、オーナーがいる事務所に村木巡査長と行っているよ」

そう言った吉田警部だったが、夏希が自分の事を‘ボク’と呼んでいる事に気付いていないようだ。

「ボクの担任に後で話を聞きたいって言っていたんです。まだですよね…?」

「多分まだじゃないか。どうしたんだ?」

「ボクも参加したいなって思ったもんで…」

「ほう…自分の担任を疑っているってわけか?」

吉田警部は意味深な笑みで夏希に聞く。

慌てて、夏希は首を横に振り、

「いやいや、そんな…。事件解決の参考にしたいなと思って…」

しどろもどろになってしまう。

「そうか…」

「青酸カリって何から発見されたんですか?」

「ペットボトルのお茶の中から発見されたんだ。青酸カリの量からして即死だろうな」

吉田警部は鑑識から報告を受けた事を夏希に教えた。

（即死か…。市田が苦しむ姿を見届けて、青酸カリの入った容器を持ち出し、カバンにワープロ書きの遺書を入れて立ち去ったってわけか。あくどい犯人だな…）

夏希がそんな事を思っていると、話し声が聞こえてきた。

振り向くと、瀬川警部と村木巡査長とオーナーである悦子が、部屋に入ってきた。

瀬川警部は夏希に気付くと、

「ああ…赤谷さん来ていたのか？」

「うん。この部屋についてオーナーに…？」

「そうだよ。どうです？ この部屋の家具の配置について…」

瀬川警部は夏希の質問に答えると、悦子のほうに顔を向けて家具の配置について聞いてみる。

悦子は部屋を見渡して、

「家具の配置が全て変えられています」

「本当ですか？」

念を押すように聞く村木巡査長。

「ええ…。亡くなった主人とこの山荘を始めてから、一度も家具の配置は変えていませんから…」

悦子はやや小さな声で答えた。

「そうですか」

「これは市田先生を殺害した後に犯人が家具の配置を変えたっていうわけですね」

「そう見て正解でしょうね」

吉田警部は同感したように呟くと、三人の警官はそれぞれに難しい表情になる。

夏希もつられて難しい表情で、再び事件の事を考え始めた。

（今まで一度も家具の配置をしていないのに、なぜ犯人は市田を殺害した後にこのような家具の配置をしたんだ？ まさか、市田が残したダイニング・メッサージが隠されているっていう可能性があるよな…？）

夏希は三人の警官のほうを見ると、自分が抱いた疑問をぶつける事にした。

「この家具の配置で考えられる事ってねーか？」

「考えられる事…？」

「赤谷さん、どういうことだ？」

夏希の問いに、二人の警部はわからないようだ。

「市田が残したダイニング・メッセージが隠されているかもしれないねーってことだ」

「それで犯人はこの部屋の家具の配置を…？」

吉田警部はなるほどという表情になる。

「多分な。まだ家具を動かしてみないとわからねーけど…」

「どうします？ 家具を動かすのは…」

村木巡査長は吉田警部に指示を仰ぐ。

これは瀬川警部も同じだった。

いくら、吉田警部と同じ階級だとはいえ、自分は管轄外で指示は出来ない。

「そうだな。鑑識が何人かいるから、我々も手伝えば夕方にはなんとかなるだろう」

吉田警部はそう判断すると、部屋にいる警官や鑑識に家具の移動させる旨を伝えにいった。

「さあ、我々もやろうか」

「やりましょう」

「ボクとオーナーはどうしたらいい？」

行きかけようとする三人の警官に、夏希は呼び止める。

「今日のところはこれでいいよ。また新たに何かわかれれば、この山荘に電話するよ。電話、大丈夫ですか？」

伝言は夏希に言ったが、質問だけは悦子に聞く。

「ええ…。それで事件が解決するなら…」

悦子は快く引き受けてくれた。

夏希はそのまま食堂に向かった。

あの後、悦子に‘お茶でもしましょう’と誘われ、悦子の部屋に行った。

和室の六畳半の部屋で、シンプルな部屋だ。

夏希のほうは学校生活の事や事件について、悦子のほうは山荘について、お互いの事を話したのだった。

二人で色々と話しているうちに、夕食の時間になってしまったわけだが、哲平に部屋に来るようにと言われていたのを食堂に向かう途中に思い出したのだ。

食堂に着くと、何事もなかったように膳に食器を置き、美夕の隣に座った。

哲平は夏希が食堂に来たのに気付いて近付いてきた。

「こら、赤谷、市田先生の部屋で事件の事を調べた後にオレの部屋に来いと言っただろ？」

「スマン、忘れてた」

嫌味のように謝る夏希。

「まあ、いい。食事が終わったら必ずオレの部屋に来いよ」

哲平の指示に、適当に返事した夏希。

「事件のほうはどうだ？ 何か収穫はあったか？」

美夕は箸を置いて聞いてくる。

「これというほど何も得られなかった。家具の配置について気付いた事があってな」

「ああ…家具の配置がどうのこうのって言ってたな。で、気付いた事ってなんなんだよ？」

「うん。家具を動かしたって事は、市田のダイニング・メッセージが隠されているんじゃないかって思ってたな。犯人に関する何かが隠されているとすれば、犯人はとっさに家具を移動させたんじゃない

かってわけだ」

夏希の答えに、感心する美夕。

「よくそんなこと気付いたな。オレだったら絶対に無理だな」

「オーナーがこの山荘を始めてから一度も家具の配置を変えた事がないって言ってたから、もしかして……って思ってたな」

夏希はそう言うのと、コップに入ったお茶を飲む。

肝心の仁は、夏希と美夕から離れて、クラスの男子友達五人と一緒に話しながら夕食を食べている。

仁とは今日の昼食後からずっと行動をしていないせいか、変な感覚に襲われてしまう。

自分の相棒を失ってしまったようで、夏希は淋しい気分になった。今、自分がなんとかして動かなければ、このまま仁と会話を交わす事もないわけで、試行錯誤しながら美夕と仁の仲を仲直りさせようと考えているのだ。

「仁の事、考えているんだろ？」

突然、美夕は夏希の心を読んで、意味ありげに言った。

「え？ あ、いや、その……」

「夏希が心配することはない。オレだっていつまでもこんな調子じゃねーよ」

美夕の言葉を信じたい気持ちだが、到底信じる事が出来ない。

（美夕がこんなだから余計に心配になるし、なんとかしたいんだって……）

夕食を食べながらそう思う夏希だが、心のつかえが取れない。

事件と友達の事、二つ同時に問題が出てくるとはよっぽど運がついていない。

それに、美夕が仁との仲を何とか出来るものなら、こんなに心配する必要もない。

夏希は箸を置き、深いため息をつく。

「もういいのか？」

美夕は半分残っている夏希の夕食を見て聞く。

「うん。ヤマテツの部屋に行かねーとな」

夏希は膳を持って立ち上がると、哲平の部屋に向かうことにした。

「瀬川警部にどんな事を聞かれたんだよ？」

夏希はラフな姿勢で哲平に聞いた。

哲平の部屋に行くと、雅史もいた。

「げっと思った夏希だったが、哲平に必ず来いと言われていたので仕方なしに部屋に入った。」

「市田先生との関係について、根掘り葉掘り聞かれたよ。別に市田先生と付き合っていたわけじゃねーのに……」

参ったというふうに答えた哲平。

「さっき僕と玉川先生のいる部屋に刑事さんが来て、山上先生と市田先生の間係を聞かれたましたよ」

雅史は哲平に向かって言った。

「なんて聞かれました？」

「二人は付き合っていたか？」とか、山上先生は市田先生に言い寄っていたところを見たことあるか？、って聞かれたんで、付き合ってもないし、言い寄ってもいなかった、って答えましたよ」

「そうですか……ありがとうございます」

雅史の答えを聞くと、ホッとした表情になった哲平。

「なんでオレだけを疑うんだよ？」

「疑うのが警察の仕事だからな。ボクはヤマテツが犯人だとは思っていないねーよ」

夏希は素直に哲平が犯人だとは思っていない事を伝えた。

「この山荘に犯人がいるってことか？」

「ああ…。証拠も何もない状況じゃなんとも言えないけど…」

夏希は寝転び、警察の捜査がどうなったか気になっていた。

青酸カリの入っていた容器は見つかったのか、家具を移動させてダイニング・メッセージがあったのかなど気になることが多い。

何の連絡もないということは、何も出てきていないのだろう。

「で、話ってなんだよ？　ボクをここに呼んだってことは何か話があるから呼んだんだろ？」

警察の話をするだけのために呼ばれたんじゃないと思った夏希は、なぜ呼ばれたのか聞いてみた。

「うん、先輩の事でな」

「オーナーの息子な。どうした？」

夏希は起き上がりながら聞いた。

「昨日、赤谷と今竹の部屋に来たんだろ？　何か言っていなかったか？」

「来たけど…何か言われなかったかって…？」

哲平の質問の意図がわからない夏希。

「いや、実は大学時代に色々あってな」

哲平はバツが悪そうにしている。

「色々って…？」

興味津々の夏希。

「ここだけの話、先輩の彼女に告白した事があってな」

声をひそめて言う哲平に、驚く夏希と雅史。

「山上先生、どうしてそんなことを…？」

雅史はいつものようにボソッと哲平に聞いた。

「サークルの飲み会の時に、先輩が彼女を連れてきていて、そこでオレが一目惚れして連絡先を聞いたってわけ。で、二回ぐらい二人で会ったことがあって、告ったけど当然フラれたよ。こういうことがあったんだ」哲平は照れながら答える。

「その後はどうなったんだよ？」

「二回目に会った時に先輩の友達に見られてバレたんだ。その事が先輩の耳に入って、こっぴどく激怒されたよ」

「当たり前だろ…」

夏希はアホらしいと思うが、人を好きになるのはごく自然な事である。

「それで、先輩と彼女は怎么样了んですか？」

雅史はその先を知りたいというふう聞く。

「別れましたよ。オレのせいなんだけど、その後、先輩は何事もなく接してくれたんだ」

「心の広い人なんだ。ヤマテツとは大違い」

「うるせーなあ…」

頬を膨らませる哲平。

「それでボクらに何か言っていなかったか確かめたってわけか…」

「そういうことだ」

「それは何回生の時の話ですか？」

「オレが一回生で、先輩が二回生の時です」

哲平は遠い目をして答えた。

「それにしても、犯人は誰だろう？ 市田先生を殺害するくらいだからよっぽどの恨みがあるんだろうな」

哲平は話を事件に話に話題を変えた。

「やっぱり僕らの中にいるんでしょうか？ いるとしたら、校内で二人目になりますね。加害者が出るのは…。被害者は市田先生で三人目だけ…」

雅史がため息交じりで言うと、同感したように哲平は頷いた。

「赤谷、何かわかった事ってあるのか？」

哲平は夏希に顔を向けて聞く。

「まだわからないんだ。また警察が連絡してくれるって言ってたけど、そんなに情報はくれないだろう。事件解決するなら証拠とかは自分で見つけろって感じだろうな」

「証拠を見つけたらって山荘内は広いぞ」

哲平の指摘に、

「そうなんだよなあ…。事務所とか見たいけど無理だろうな」

（いくらなんでも非常識になってしまふからな…。）

「何か用があるって言ってさりげなく調べるっていうのはどうですか？」

雅史は夏希に提案してみる。

「それいいかも！」

夏希は両手を叩く。

「調べるには弱い理由じゃないか？　あまり長く調べていると不審がられるし、単刀直入に言ったほうがいいんじゃないか？」

「そうか…：そうだよなあ…。警察でもねーのに、了承してくれるかどうか…：」

頭を掻きながら言う夏希。

「大丈夫でしょう。昼間の赤谷さんを見ているし、何より警察より親近感があると思う」

「それはあるかもな」

哲平も雅史の言ったことに頭を軽く縦に振りながら言う。

「明日にでも行ってみるか。ヤマテツと市田の関係も否定しなきゃな。…：ていっても、警察は二人の関係をまだ疑ってるみたいだしな」
チラッと哲平を見る。

「そうみたいだな」

苦笑気味の哲平。

「今日のところは部屋に戻るよ。美夕が心配してるだろうし…：」

「じゃあ、僕も…：」

夏希と雅史は同時に立ち上がる。

「そうだな。あまり長い話し込んでいると、玉川先生の目が怖いからな」

哲平は話は終わりだという口調だ。

「それもそうだ」

ケラケラ笑う夏希。

「また明日なっ！」

夏希は哲平に手を上げて言うと、雅史と共に部屋を出ていった。
事件の事を考えながら…。

みんなの心のストレス

翌日の午前、夏希達のクラスは外でスポーツをすることになった。事件後、山荘内の空気がどんよりしているため、気晴らしに外を出ようという洋の提案である。

外でスポーツといっても、山荘から少し離れた体育館でバトミントンかバレーボールといったオーソドックスなスポーツをするのだ。

夏希達のクラスはジャージに着替え、体育館に集まると、三人の教師が待っていた。

「今日、バトミントンとバレーボールをやるが、自分はどっちがやりたいか決めてくれ」

洋は夏希達に伝えると、どっちがやりたいか手を挙げさせた。

バトミントンの三分の二、残りがバレーボールとなり、バトミントンチームは体育館の端でやることになった。

夏希はバトミントンで仁と一緒にだ。

美夕のほうかバレーボールチームにいつてしまい、別々になる。

（仁とバトミントンで一緒だとは何かのチャンスだ。美夕との仲をなんとかさせなければ…）

仁と話せる事を心の中で思いながらラケットを持った。

夏希達がスポーツをやり始めてから、一時間が経過した。

バトミントンチームは少し休憩しようということになり、夏希は仁の隣に座った。

「オウ！ 夏希、事件のほうはどうなんだよ？」

仁は何事もなく夏希に声をかけてきた。

「全然だ。まだ何もわかっていないんだ」

首を横に振り答える夏希。

「そうなんだ…」

仁はそう呟くと、バレーボールをやっているクラスメートのほうを見る。

なんとなく、マリンの事を考えているようにもとれる。

「あのさ、仁…」

「ん？ どうした？」

仁は我に返ったように夏希のほうを見る。

「美夕との事なんだけど、仲直りしろよ。いつまでも美夕とケンカしたままでいたくねーだろ？」

夏希は仁から目を反らして体育座りをしながら言う。

「二人が仲悪いままだとどうしていいのかわからない。山荘に来る前見たみたい三人で仲良くしたいんだ」

今度は仁のほうをまっすぐ見て、今の自分の気持ちを伝えた。

本当は色んな言葉で伝えたかったのだが、ストレートにありのままに伝えたほうが伝わりやすいと思ったのだ。

「まだ仲直りするつもりはない。でも、夏希の気持ちは十分に伝わったぜ。心配してくれてありがとうな」

仁はいつもより柔らかい口調で言った。

その口調からは美夕と仲直りしたいが、仲直りする術がないというふうにも取れてしまう。

（仲直りするつもりはない、か…。ボクが中に入ってもどうにもならないってわけか。時間が経てば経つ程、仲直りしにくいから早めについて思ったけど、本人達の気持ち次第か…）

バレーボールをする美夕を見つめ思う夏希。

夏希にとっては、二人がケンカをされるとどっちにつくのか困るのである。

今は美夕についているが、ヘタすれば転入してきて以来、ずっと仲がいい仁についていたかもしれない。

だけど、自分は美夕のほうについた。

それはなぜなのか、夏希自身よくわからない。

恐らく、クラスに馴染めなくて、影はあるけど意外と素直なところもある美夕は、クラス内で友達がいらない。

性同一性障害の気持ちかわかるのは自分だけ。

そういうところから美夕についたのだろう。

「夏希、一緒にバトミントンやろうぜ！ オレ、絶対に勝つから！」
仁は立ち上がり白い歯を見せる。

「ボクだって。仁となら俄然ヤル気出たし！」

午前十一時半、二つの競技を終え、制服に着替えた後、食堂で昼食を取るようになった。

美夕と一緒に食堂に行こうと思ったのだが、部屋に忘れ物をした夏希は、美夕に先に行って欲しいと伝えて、急いで部屋に向かった。夏希は部屋から出ると、静かな廊下を歩く。

（警察からは何の連絡はねーし、どうしたらいいんだよ？ 事件解決の糸口は見つからねーしさ。それに、仁も美夕と仲直りするつもりはないみたいだし…）

少しふてくされ気味の夏希。

階段を下りようとした瞬間、背中を勢いよく押された夏希は、階段から転げ落ちその場で気を失った。

それから、どれくらい時間が経ったのだろうか。

夏希はゆっくり目を開けた。

目の前がぼんやりしている。

「気がついたか？ 赤谷」

哲平の声が夏希の耳に入ってくる。

夏希は哲平のほうを向くと、

「ヤマテツ…ここは…？」

「赤谷と今竹の部屋だ。なかなか赤谷が食堂に来ないから、オレが探しに行ったらところ階段下で倒れていた赤谷を発見したってわけだ。悦子さんと雅美さんがずっとついててくれたんだ」

哲平はそう言うのと、悦子と雅美のほうを見た。

「大丈夫？ どこか痛いところはない？」

悦子は夏希の体を気遣う。

「今のところは…。みんなは？」

「百合部屋にいるよ。赤谷の事、心配してたぞ」

「そうか…。誰かに背後から押されたんだ」

夏希は背中を押された事を哲平達に伝える。

「こんなことをするのって誰なのかしら？ 殺人事件も起こっているから心配だわ」

雅美は右手に当てて身震いして言った。

「何か思い出せる事はないのか？」

哲平は夏希に背中を押された当時の事を聞く。

「全然…。一瞬の事だったし、背後からだったからな」

夏希は首筋をさすりながら答える。

「そうか。警察に報告したほうがいいですかね？」

哲平は悦子に判断を委ねる。

「山上先生の同僚も亡くなっている事もあるので、警察に報告しておいたほうがいいかもしれませんね」

悦子は夏希の事を心配しながら言う。

「じゃあ、私が…」

雅美は悦子が報告する前に自分から率先して言うのと立ち上がる。

「そうね、お願いするわ」

悦子は雅美にお願いすると、雅美は頷いて部屋を出ていった。

「そういえば、ヤマテツの先輩は…？」

「仕事だよ。昨日、みんなが夕食終わった後に雅美さんと子供が住む家に帰っていったよ」

「そうなんだ。じゃあ、ボクはみんなのところに…」

布団から出る夏希に、

「動き回っていいのか？」

「大丈夫だって。まだ少し頭がボーッとするけど怪我はないみたい

だし…」

「…ならいいけど、無茶はするなよ」

夏希は自分を心配してくれる哲平を横目に、

「ああ…。市田を殺害し、ボクを階段から落とした犯人をこのまま放置しておくわけにはいかないからな。雅美さんが警察に連絡してくれたから、多分来ると思うけど色々警察に聞きたい事があるんだ。ボクが寝込んでたんじゃ何も出来ないし、警察以外で事件の事で動ける人間がいねーからな」

夏希はボーっとした頭で力強く言った。

夏希が百合部屋のドアを開けると、クラスメートが夏希のほうを見た。

「赤谷さん！ 大丈夫なの？」

一人の女子生徒が心配そうに近付いて聞いてくる。

「大丈夫だ。怪我もねーしな」

夏希は歩きながら自分の席に着く。

「そりゃあ、良かった。オレら心配してたんだぜ。赤谷が襲われて、もう事件解決は無理だって言ってたところなんだから…」

「そうそう。警察なんてアテになんねーし、頼りになるのは赤谷だけだぜ」

二人の男子生徒の口調からクラス全員が夏希がいないとダメだと思っっているのがよくわかる。

「ヤマテツの先輩の奥さんがボクの事で警察に連絡したよ。そこまですげさにしなくてもいいにのな」

夏希は雅美が警察に連絡してくれた事を感謝しつつ、そこまでしなくてもいいのという思いがあった。

「大げさな事よ。赤谷さんがいないと市田先生を殺した犯人がわか

らないもん」

夏希の横に座っている女子生徒が頬を膨らませる。

「そりゃあ、そうだけど…」

苦笑気味の夏希。

「市田を殺した犯人って誰なんだよ!？」

とげとげしい声が夏希の背後から聞こえた。

振り向くと、夏希のすぐ後ろに座っているクラス一ヤンキーの増田義隆が、イスに深くもたれかかり座っている。

「まだそんなことわかんねーよ」

「なんでわかんねーんだよ？」

「証拠とか全くなーんだって…」

夏希の答えに、鼻で笑う義隆。

「なんだよ？ お前、前の事件で夏希に助けてもらって、その態度はよ。夏希に感謝しろよな」

仁は義隆の態度の悪さに怒り気味で義隆に言う。

「オレは助けてくれなんて言った覚えはないね。赤谷が勝手にしたんだろ？」

義隆は偉そうにして腕を組んでいる。

「お前…」

仁は義隆の胸ぐらを掴んで殴りかかろうとすると、

「やめろよ。確かにあの事件はボクが勝手にやった事だ」

夏希は冷静な態度で義隆に接する。

「増田君もそんなに突っかからないでよね」

女子生徒が強めの口調になって言う。

「突っかかってなんていねーよ!」

義隆は舌打ちをしてから言う。

クラス全員、義隆の態度に我慢がならないようだ。

「そんなんだからみんなに嫌われるんだって…」

ボソッと呟くように言った夏希。

「あん？」

「いつまでそんな態度取ってんだよ？ 反抗期かなんだか知らねーけど素直になれよな。みんな、お前のその態度にウンザリしてんだよ」

夏希はイラついた口調でクラスメートの思いを代弁した。

「うるせーんだよ！ お前みてーな男か女かわかんねー奴にお説教なんてされたくないんだよっ！！」

義隆の激しい言葉に、完全にブチ切れた夏希は、

「なんだよ！！」

机を蹴り飛ばした。

そして、立ち上がり義隆の胸ぐらを掴んだ。

「男か女かわかんねー奴ってどういう意味だよ！？」

「そのままの意味だよ！！」

二人はそう言いながら、殴り合いが始まり、部屋は騒然となる。

「誰かヤマテツを呼んでこいよ！」

仁が叫んだのと同時に哲平が部屋に入ってきた。

「オイッ！ お前ら二人何やってんだ！？」

哲平は二人の間に入る。

「とりあえず、落ち着け。何があったか知らないが、二人共、オレの部屋に來い。いいな」

夏希と義隆がこっぴどく怒られたのは哲平だけではなかった。

洋にもキツく注意されたのだった。

明日の帰る時間までに反省文を原稿用紙に一枚書けと言われ、原稿用紙を渡された。

夏希が自分の部屋に戻ろうとすると、廊下で瀬川警部に呼ばれた。

「瀬川警部…」

「誰かに襲われたと聞いたが大丈夫かい？」

「ああ…。事件のほうは？」

「それも兼ねて来たんだ。ゆっくり話せる場所があるといいんだが…」

「玄関先なら静かだと思うけど…」

二人は玄関先に向かった。

玄関近くにあるイスに腰をかける。

「青酸カリが入った容器が見つかったよ。市田先生の部屋の窓の外から外へ投げ捨てられていた。プラスチック製の容器だったんだ」
瀬川警部は手帳を見て答えた。

「市田の部屋からは何か出たのか？」

「ああ：ダイニング・メッセージじゃなかったんだが、犯人の物と思われる靴跡が畳についていたんだ」

「サイズは？」

「二十四・五？だ」

「そうなんだ…」

（自分の靴跡がついたから家具を移動させたってわけだな。サイズ的には女性って感じだけど、男性が履いていたかもしれねーな）

夏希はため息をつきながらそう思う。

「でも、こって土足厳禁なんじゃ…」

「そうなんだ。恐らく、外部犯だと見せかけたかったんだろう」

瀬川警部は手帳を上着の内ポケットに直しながら言った。

「外部犯にしようたって市田がこの山荘に来る事を知ってなきゃ、殺害出来ねーのにな。よっぽどストーカーじゃないと無理だな。でも、外部犯らしき人物はこの山荘にはいない。山荘の外まではわからないけどさ」

夏希は外部犯説に納得がいかないようだ。

「それはな。赤谷さんの中に犯人が…？」

「多分な。…ていうか、ヤマテツの事、疑っているんだろ？」

夏希は昨夜哲平に聞いたことを思い出した。

「疑ってはいないさ。参考までに話を聞いたただけだ」

「参考にねえ：」

（ヤマテツの話じゃ、参考って感じじゃなかったけど：）

「ヤマテツ以外にみんなの話、聞いてんのかよ？」

「学校関係者だけな。オーナーや雅美さんは市田先生と初対面だからな」

瀬川警部はカバンから缶ジュースを取り出した。

夏希にはオレンジジュースが渡された。

「ありがとう。昨日も言っただけど、オーナーも知り合いかな。あと雅美さん知り合いの可能性もある」

夏希はオレンジジュースを開けながら言う。

どうも悦子と雅美のどちらかが知り合いではないかという疑問が消えない。

「知り合いっていてもなあ：どこで知り合いになったというのかわかればな。知り合った証拠もあればいいんだけどな。もし、知り合いだとしてどんな共通点があるっていうんだ？」

瀬川警部はコーヒーマグを一口飲んでからわからないという表情を浮かべる。

「それはまだわかんねーって：」

夏希はオレンジジュースの缶を持ったまま、ドアの外の景色を見る。そこに一人の男性が入ってくる。

哲平の先輩であり、雅美の旦那である良夫だ。

「あ、刑事さん、どうしたんですか？」

良夫は驚いた表情で夏希と瀬川警部を見る。

「この娘に話がありました：。良夫さんは今までどちらに：？」

「昨夜、自宅に戻り、午前中に職場に行って休暇届を延長してもらえように行っていたんです」

そう答えながら良夫はコートを脱ぐ。

「そうだったんですか」

「良夫さんはどこで働いているんですか？」

何気ない質問をする夏希。

「印刷工場だよ」

優しく微笑んで答えてくれる良夫。

「もしかして、大和印刷工場ってところだったりします？」

「そうだよ。よくわかったね」

ピタッと当たった夏希ぬ、目を丸くして驚く良夫。

「なんとなくね」

夏希は頭を掻きながら笑う。

「それでは、僕はこれで…」

良夫は二人に会釈をして立ち去る。

良夫が立ち去ると、瀬川警部は夏希の耳元で、

「なんでわかったんだ？」

「中学の頃、大和印刷工場に見学に行ったんだ」

夏希の答えに、納得した表情をした瀬川警部。

「瀬川警部、こっちには泊まりで来てんのか？」

「いいや、違うよ。昨日も夕方六時に村木と自分の署に戻ったよ。

今日、村木は別の事件で借り出されているんだがな」

瀬川警部は缶コーヒーを飲みながら答える。

「そっか…」

「赤谷さんを階段から突き落とした人物は、恐らく市田先生を殺害した犯人だろうな」

「そうだろうな。早いところ犯人を探さねーとクラスのみんなも不安がつてるからな」

夏希はマリンと自分を襲った犯人を許せないでいた。

本当の理由

夏希は瀬川警部と少し話をして別れると、マリンの部屋に向かうことにした。

まだ事件の事は何もわかっていないため、少しでも情報を入れておこうと思ったのだ。

マリンの部屋にあった家具は全て部屋から出されていた。

部屋に入ってすぐのところにあるベッドが置いてあった場所に、瀬川警部が言っていた靴跡が四つついてあった。

夏希は靴跡を確認すると、窓を開け青酸カリが捨てられていた場所を見つめていた。

（この下は草が多いんだな。奥のほうに捨てればわかんねーな）

窓を閉めると、部屋を見渡す。

「赤谷さん：？」

夏希が振り向くと、さっき会ったばかりの良夫が立っていた。

「ヤマテツの先輩：」

「事件のほうはどうだい？」

「うーん：まだなんとも：」

「そうか。さっき山上に会ったよ。今日一日、大変だったみたいだな。何者かに襲われたり、クラスメートとケンカしたり：」

良夫は哲平から聞いたのか、夏希に大変だったなというふうに言った。

「ヤマテツ、全部言ったんですか：」

夏希は参ったなという表情をする。

「襲われた時、頭打ったりしなかったか？」

良夫は心配そうに聞く。

「打ったけど大丈夫です」

夏希は気丈に答えた。

「山荘から戻って頭が痛むようなら病院で診てもらったほうがいい

と思うよ」

「あ、はい…」

素直に返事した夏希。

（こないない人の彼女を取ろうなんてしたなんてな…）

軽くため息をつきながらぼんやりと思う夏希。

「なんで事件を解決しようなんて思ったんだ？」

「子供の頃からミステリー小説が好きでよく読んでいたんです。ボクの学校で事件が起こって、試しに事件解決するって言ってしまつて…」

恥ずかしそうに話す夏希。

「それで事件を解決してしまつたってわけね」

「そうです」

「よく解決出来たもんだ。警察ってのは情報提供してくれないんだろ？」

「全くってわけじゃないんです。ほんの少しだけ…。それよりなんでボクのところに…？」

夏希は自分に用があるのだろうと思い聞いてみる。

「さっきも言ったけど何者かに襲われたって聞いたもんでね。帰って来た時でも良かったんだけど、会社から帰ってきたばかりだったから…。事件が起こったばかりだったから心配になったんだ。山上が、市田先生の部屋にいるだろう、って言われて来てみたんだ」

良夫はゆっくりとした口調で言った。

悦子や雅美同様、良夫まで気を遣ってもらい申し訳なくなる夏希。

しかも、クラスメートからも頼りにされているのに心配かけてしまい、もっとしっかりしなくては…という思いが出てきた。

「心配かけてすいません」

「いいんだよ」

優しく微笑む良夫。

（ボクを襲ったのは誰だ？ 市田を殺害した人物。あるいはこの事件の騒ぎに則った人物。この場合、前者のほうが有力だけど、ボク

を襲ったってなんにもねーぞ？」

夏希は部屋の中を見つめながら思う。

（それに市田を殺害した理由も全くわからねーな。犯人はボくら学校関係者が一番有力だけど、ヤマテツの先輩達だってどこでどう繋がっているかなんてわかんねーもん。やっぱ、警察に行つて、市田の事なんとか聞き出ねーとな）

夏希はあとで警察に行こうと思っていた。

そう思っていた夏希の横で、窓の外を見ながら良夫が鼻歌を歌い始めた。

「良夫さん、その歌……」

夏希が首を傾げて良夫を見ると、

「ああ……この歌は昔付き合っていた彼女が好きな歌で、僕に教えてくれたんだ」

照れながら話す良夫。

夏希はとっさに哲平が告白した彼女だと思ったが、その彼女じゃないようだ。

今時の若者が歌うような曲ではないからだ。

人の過去をあまり詮索しないほうがいいと考えた夏希は、

「すごくいい曲ですね」

「うん。僕の好きな曲の一つでもあるんだ」

誇らしげな良夫。

そう答えた良夫の思いが夏希にはわかるような気がした。

誰にだって好きな曲の一つや二つはあるからだ。

「でも、それってその人の事が今でも好きだってことですよね？」

不意に口から出た夏希の質問に、一瞬、良夫は瞬きをして夏希の顔をじつと見る。

「……そうだな。そうかもしれないな。結婚しているのにいつまでも過去に付き合っていた女性に教わった曲を口ずさんでしまうなんて、雅美に失礼だよな」

伏せがちになる良夫。

「嫌味で言ったんじゃないんで、気にしないで下さい」

良夫の様子を見て、慌て気味の夏希。

「いや、君の言う事が妥当だからな」

良夫は気にする様子もなく言った。

内心ホッとした夏希がいた。

夏希は悦子の事件を借り、警察へと向かった。

哲平や洋には事件の事で警察に行くと報告してある。

洋には何者かに襲われているため関わるな、と言われたが、そこで引き下がる夏希ではない。

‘市田が殺害されて、自分まで誰かに襲われている。これ以上、被害者を出したくない。自分がこういう目に遭ったからこそ、ちゃんと犯人を探してケリをつけたいんだ、’

神妙な面持ちで、今自分に出来る事をやり尽くしたいんだ、という思いを洋に全てぶつけた。

そんな夏希の思いを理解した洋は、警察に行くことを承諾してくれた。

そして、事務所に行った夏希は、悦子に事情を話し、自転車の鍵を借りて、警察までの道のりを書いた地図を渡してくれた。

途中、何度も自転車を止めて、地図で確認しながらだったため、警察に着いたのは山荘を出て三十分後だった。

受付で吉田警部を呼んでもらい、会議室に通された。

夏希が会議室に入って五分経過した時に、吉田警部はやってきた。

「待たせてスマンな。三日前に起きた窃盗事件の事情聴取をしてい
たんだ。それで、今日はどうしたんだ？ 市田先生の事か？」

吉田警部は早口で夏希に用件を聞いた。

「はい、そうです。市田の荷物を見せて欲しいんです」

夏希はマリンの荷物を見せてくれるようお願いした。

昨日、マリンの荷物をきちんと見ていないのだ。

「それは大丈夫だ。ちょっと待ってくれ」

吉田警部は頷くと、会議室を出ていった。

二、三分して戻ってくると、段ボール箱一つ持ってきてくれた。

「ああ、すいません」

夏希は立ち上がり礼を言うと、一つ一つビニール袋に入れられたマ
リンの荷物を手に取り始めた。

「ほとんど今時の女性が持つような物ばかりだ。ポルトガル出身と
いうことで、ポルトガルっぽい持ち物もあるがね」

荷物を見る夏希の隣で、座っている吉田警部はマリンの持ち物を珍
しそうに言う。

「手帳やケータイの中身を見たいんだけど、袋から出していいか？」

「ああ：手袋を使ってくれ」

吉田警部は捜査で使う白い手袋を夏希に渡した。

いつもドラマで見ている白い手袋を初めて使う夏希にとっては、と
ても新鮮な気分だ。

日記帳は見てしまったが、手帳は個人のプライベートが書かれてい
るため、あまり見たくはないのだが、こればかりは仕方ない。

犯人に近付くための手掛かりが何かあるかもしれない。

手帳は一月から一通り見るが、これといって特にならない。

そして、ケータイの電源を入れた後、

「そういえば、瀬川警部は…？」

「赤谷さんが来る十五分前に帰ったよ」

「そっか。もし、明日、事件解決って言ったら呼んでくれるか？」

「ああ、もちろん。村木巡査長も呼ぶさ」

吉田警部はタバコを吸いながら答える。

タバコの匂いが苦手な夏希は、必死に耐えながらケータイのメモリーを見る。

メモリーにあだ名らしき名前で登録してあるものがあつた。

「あの、これ：」

夏希は吉田警部にケータイを見せる。

「あだ名だな。‘ブルーさん’って誰だろうな？」

吉田警部はケータイを見ながら首を傾げる。

「あだ名じゃなくて名前だったりして？」

「名前：？」

「うん。市田は日本人とポルトガル人のハーフだから、ブルーっていう名前の人がいてもおかしくないなって思つて：」

夏希の意見に、イマイチな反応をする吉田警部。

「しかし、名前だとしても一人だけじゃないか。外人の名前は：」

吉田警部はケータイのメモリーをアから順に見ながら言う。

夏希も横から見ながら、

「それもそうだな。やっぱりあだ名かな。入つてるメモリーは全てフルネームで入つてるし：」

ため息をつき腕を組む。

（‘ブルーさん’か：。誰かさえわかれば犯人に近付くと思うんだけどな。一体、誰なんだろう：？）

夏希は吉田警部からケータイを受け取ると、念入りにケータイに入っているメモリーを調べる。

データフォルダの音楽が入つているところを見ると、日本の曲の中に何曲か外国の曲が入っている。

恐らく、ポルトガルの曲なのだろう。

「曲、流してもいい？」

「ああ：構わんよ」

吉田警部の了承を得ると、外国の曲を流し始めた。

当たり前だが、二人にとって聞いた事のない曲ばかりだ。

全て聞き終えると、次はグラフィックを見る。

マリンの家族やポルトガルの景色が流れている。

「これといって何もないな」

吉田警部は収穫は何もなしといった表情を浮かべる。

「いや、そうでもないぜ。市田のケータイには犯人に関する物が入っていたからな」

夏希はマリンのケータイを閉め、力強く言った。

「え？ 犯人がわかったのか？」

「大体はな。まだ状況証拠だけで物的証拠がないんだ。もう少し調べなきゃいけねーことがあるんだ」

夏希は次にしなければいけないことを考えながら言う。

「明日にはわかるのか？」

「大丈夫だ。物的証拠はすぐに見つかるはずだ。とりあえず、明日の午前十一時に山荘に来て欲しいんだ」

吉田警部は夏希の言葉を信じて頷いた。

「では、早速、瀬川警部に伝えておくよ」

「瀬川警部から聞いたけど、青酸カリが入ってた容器が見つかったって…」

「そうなんだ」

「指紋はついていたんですか？」

「まだ鑑識からの報告はないんだ。もうそろそろだと思うんだがね」
そう言うと、吉田警部は時計をチラッと見る。

「容器はいつ見つかったんですか？」

「今日の午前だよ」

「え？ 山荘に来ていたんだ？」

目を丸くする夏希。

「ああ…。赤谷さん達が体育館でスポーツをやっていた最中に来て見つけたんだよ」

吉田警部の答えに、そうなんだという表情をして頷いた夏希。

「とりあえず、毒殺の結果も添えて欲しいんだ。ボクも推理の材料

となるから…」

夏希はマリンのケータイを握りしめたまま言った。

山荘に戻った夏希は、駐車場を調べた後、事務所に行き、悦子に自転車の鍵を返すついでに聞かなくてはいけないことを聞き終え、夕食を食べに食堂に向かった。

夕食後、部屋に戻ると夏希は改めてホッとした。

夏希と美夕はベランダに出ると、寒い澄んだ空気が二人の頬に当たる。

「身体、大丈夫なのか？」

「うん。このとおりピンピンしてるぜ」

夏希は身体を大げさに動かせてみせて答える。

「全く事件に構ってるからだよ。犯人に襲われたっていうのに増田とケンカしたり、警察に行ったり…」

呆れ返る美夕に、言い返す言葉もない夏希。

「で、犯人はわかったのかよ？」

「まあ、大体はな。明日までになんとかする」

「へえ…。前と違って事件解決早いんだな」

美夕は空を仰いで言う。

「もう一度、市田の部屋に行って調べたい事があるんだ。犯人はわかってるんだけど状況証拠だけだからな」

夏希は深呼吸してから言う。

「無茶はするなよ。夏希が襲われたって聞かされた時、この事件は迷宮入りだ、なんて言ってる奴がいたくらいなんだから…」

「迷宮入りって…」

苦笑気味の夏希。

「それよりさ、美夕に聞きたい事があって…」

夏希は苦笑気味から真剣な表情になる。

「聞きたい事ってなんだよ？」

「なんで、仁に突っかかるんだよ？ 仁が市田に好意を抱いていた事は前から知っていたのに、全くわかんねーんだよな」

夏希の質問に、口を閉ざす美夕。

「黙ってたらわかんねーよ」

夏希は困った表情を浮かべる。

「これには理由があるんだ」

ようやく口を開いた美夕。

「理由…？」

夏希は美夕にどんな理由があるのか、全くといっていいほど見当がつかないからだ。

「小六の時、性同一性障害ながらも初めての恋をしたんだ。もちろん、相手は男だ。その子は走るのが大好きで、毎日でも入っているような子で、クラスの誰からも人気があった。そして、小六の秋にクラスのある女子が転校する事になったんだ。その事を知ったオレの好きな子は、‘オレも転校したい’って言い出して…。オレの初恋の相手は、転校していった女子が好きだったんだって知ったってわけさ」

美夕は当時の事を思い出しながら淡々と語る。

「その子が転校していった後も、一緒に行きたかったな、とかばかりだったんだ」

「市田の事を話す仁を見て、初恋の相手を思い出したってわけか…」
夏希は納得したように、ため息まじりで言った。

「そういうわけだ。当時の事が仁とダブってしまっただけでイライラしてたんだ。夏希には心配かけて悪かったと思ってる」

美夕は俯きながら夏希に謝った。

「いや、いいんだ。同じ事が二度も続くと嫌な思いをするのは、誰

にだってあるからな。とにかく明日になれば仁に謝るんだ。仁もな
んで自分ばかりって思っているだろうからな」

「夏希もついてきてくれるか？」

心なしか不安げな表情の美夕。

そんな美夕の気持ちを汲み取って、

「大丈夫だよ。ボクもフォローしてやるからさ」

夏希の言葉に、ホッとした表情を見せた美夕だった。

犯人の悔やむ想い

翌日、午前七時に起床した夏希は、朝食までに事件の事を整理しながらメモをしていた。

朝食を終えると、哲平達に事件の事で話したいことがあるから菖蒲の部屋に来て欲しいと伝え、自分の部屋に戻るとケータイで警察に最終確認をしたり、他に電話をしなくちゃいけないところがあつたりとバタバタしていた。

事件解決のために色んな作業をしているうちにあつという間に夏希が指定した午前十一時になった。

菖蒲の部屋にはクラスメートや教師、山荘関係者に三人の警官が集まった。

「赤谷、事件の真相を話してくれるらしいじゃないか」
前に出てきた洋は、夏希を見つけ堰を切ったように言った。

「ああ：市田を殺害し、ボクを襲った犯人がわかったぜ」

夏希はまだ前に出てこないで座ったままで、全員というより洋に向けて言った。

それは夏希をバカにするように言った洋に、自分は短い時間で事件を解決出来たと証明したかったからだ。

「では、早速、事件の真相を話してもらおうじゃないか」

洋は早く始めてくれという口調で夏希に言った。

夏希は緊張をほぐすように一息、息を吐いた。

そして、前に出ると今回の事件の真相を話し始めた。

「これからこの山荘で起こった事件に話したいと思います。この事件は明らかに市田だけを狙って殺害して、ボくら学校関係者に犯人に仕立てあげた。それはなぜか。市田を知っているのはボくら生徒や教師だけであり、悦子さん達や警官は市田の事を知らない。いくら、プライベートの事を話しているからといって人間関係まで事細かに話しているわけではない。そこが犯人の思惑なんだ」

夏希は全体をゆっくりと見ながらゆっくりと話す。

「じゃあ、僕達だけじゃなくオーナーや警察の人達も市田先生の事を知っていたってことかい？」

前に座っている雅史は、小さな声でボソッと聞く。

夏希は雅史の小さな声を聞き取ると、

「そういうこと。犯人はボクら学校関係者に犯人がいるとまんまと騙されていたってわけだ」

「でも、私達は亡くなった先生の事は存じ上げませんけど…」

悦子は遠慮がちに夏希に言う。

「実は学校関係者以外に一人だけ市田の事を以前から知っていた人物がいたんです」

夏希がそう言うと、悦子や警官達は互いの顔を見合わせた。一体、誰なんだろうと探り合いをしているように見える。

「この山荘に行こうって言い出したのってヤマテツだったよな？」

「そうだけど…それがどうした？」

「もしかして、市田も山荘方面に行きたいって言わなかったか確認しただけだ」

「そういえば、前に一度山荘方面に行った事があって、もう一度行きたいんだってことは言ってたぜ」

哲平は顎に手を当てて答える。

「それならなおさらボクら学校関係者以外にも山荘方面の人間も市田の事を知っていた可能性があるってことだよな？」

「でも、山荘方面についてても山荘に来たとは限らないんじゃない？」
村木巡査長はわけがわからない様子だ。

「確かにそうかもしれない。ここでよく考えて欲しい。この辺りには山荘以外、来る目的があるようなものでもあるか？」

夏希のヒントに、吉田警部は何か気付いたようにハッと立った。

「この辺りはこれといって何もないんです。唯一、この山荘だけが他の地域からも来れる場所なんですよ」

吉田警部は瀬川警部に向かって言った。

「…ということは、市田はこの山荘に来た事があったり通ったりしたかのどちらかだってわけだ」

「しかし、山荘に来たからといって一度来ただけでは、悦子さん達の顔を覚えているかね？ 人の顔を一度で覚えられるはずもないし、よっぽど交友がないと無理なんじゃないかな」

瀬川警部はわけがわからない様子で言った。

わけがわからないでいるのは哲平やクラスメート達も同じだ。

「山荘に来たというより他の場所で知り合って、犯人はこの山荘方面に住んでいるとでもいいえば…」

「赤谷、そういうなら早く犯人の名前を言うんだ。グダグダ言っても仕方ない。説明は犯人を言った後でもいいだろう」

洋は夏希の言葉を遮ってイライラさせながら言った。

夏希はため息まじりで頷いた。

「市田を殺害し、ボクを階段から襲った犯人は…」

いったん間を空ける夏希に、部屋中は犯人は誰だろう、という空気に包まれた。

「あんただよ、和田良夫さん!!」

大声で言った夏希の声に、雅美の横に立っていた良夫はうろたえた。

「まさか、あなたが殺ったの？」

雅美は冷静な口調だったが、表情は動揺を隠しきれないでいる。

「そんなことしてないさ。あの子のでっちあげなんだから…」

良夫はうろたえたまま否定する。

「まず、一日目の夕食後に市田から、八時から自由時間だから部屋に来て欲しい、って言われ、青酸カリの入りの飲み物と共に市田の部屋に向かった。青酸カリの飲み物を飲ます前に色々話をしたら、青酸カリ入りの飲み物を飲ませ、市田が死んだのを確認してからあらかじめズボンのポケットに入れておいた青酸カリの容器を市田の部屋の窓から投げ捨てた」

マリンの殺害方法を話した夏希。

「でも、ここで一つ問題が起こってしまったんだ」

「問題：？」

哲平は首を傾げる。

「ああ：二十四・五cmの靴跡がついてしまったことだ」

「靴跡っていつでも土足厳禁じゃないのか？」

洋は夏希の言っていることがおかしいことを指摘した。

「確かにこの山荘は土足厳禁だ。良夫さんは外部犯に見せかけるために、市田が死んだ後に二十四・五cmの靴を履いたけど、思った以上に靴の裏の汚れがひどくて、部屋中にたくさんの靴跡がついてしまった。それで良夫さんは家具の配置を変える事を思いついた。良夫さん、あんたは二十四・五cmの靴を履くのかよ？」

夏希は鋭い目つきで良夫に問う。

「いや、僕は二十六cmだけど：」

夏希から目を逸らして答える良夫。

「二十六cmなのに、なんで二十四・五cmの靴なんだ？ 別に自

分と同じ靴のサイズでも良かったのに：」

村木巡査長は全く見当がつかないような表情をする。

「それはボクにもわからないんだ。二十四・五cmの靴は悦子さんか雅美さんのどちらかではないですか？」

次に悦子と雅美に聞いた。

「二十四・五cmの靴を履くのは私です」

雅美が手をあげて答えた。

「そうですか。さっきも言ったとおり外部犯に見せかけようとした良夫さんは、雅美さんの靴を履いて犯行を犯したが部屋に靴跡がついてしまった。警察に調べられたら雅美さんの靴だとバレてしまう。だから、家具の配置を行ったんだ」

「遺書はどこで打ったんだ？」

瀬川警部は聞く。

「恐らく、事務所にあるパソコンで打って、市田のカバンに入れたんでしょう」

夏希はそう言うと、吉田警部を見た。

「事務所を調べさせてもらったところ、市田先生のカバンの中から見つかった遺書の手紙と事務所にあるワープロ用紙と一致しました」
吉田警部は手帳を見て、全員に伝えた。

「犯行後、下駄箱に雅美さんの靴を戻し、何食わぬ顔でボクと美夕の部屋に来たんだ」

「じゃあ、赤谷を階段から突き落としたのなんですか？」

良夫が犯人だと信じられないでいる哲平は、良夫の顔を見てから夏希に聞いた。

「市田が死体で発見された日の朝、ボクが自殺じゃなく殺人だ、と意義を唱え、色々と探り当てたのに慌てた良夫さんは、ボクを襲うことにしたんだ」

「襲ったっていつでも良夫は会社に行っていて無理だったんじゃない？」

悦子は夏希の言っている事と良夫の行動に矛盾を感じていた。

「悦子さんの言ったとおり、ボクが襲われた時間、良夫さんは会社に休暇届の延長を出しに行っていた。しかし、良夫さんは会社には行っていなかったんだ。なぜなら、車は山荘裏に止められていたんだから…」

夏希の言葉に、驚く一同。

「どういう事なんだ？」

瀬川警部は目を丸くして聞いた。

「一昨日の夜、良夫さんは会社に戻る、と言い、駐車場から山荘裏に車を止め一夜を車の中で過ごした。昼まで車の中で過ごした良夫さんは、ボクを襲うつもりで山荘裏のドアから山荘内に入り、一人で階段を下りようとするボクを背後から突き落とした。そして、また山荘裏のドアから出て、夕方に前日まで止めていた駐車場に車を止め、正面玄関から戻ってきたってわけさ」

夏希は言い終えると、全員の反応を見る。

「でも、僕が犯人だという証拠があるのか？　あるなら見せて欲しいが、なければ…」

「あるんだよ」

良夫の言葉を遮って言った夏希は、吉田警部に持ってきてもらったマリンの私物を全員に見せた。

「ケータイがどうしたんだ？」

雅史はマリンのケータイを見ると、ボソッと夏希に聞いた。

「このケータイのデータフォルダに入っている曲の一曲と良夫さんが口ずさんでいた曲が一緒だったんだ」

夏希はそう言うのと、曲を流した。

「あんたは昔付き合っていた彼女に教えてもらったと言っていた。それは市田の事だったんですよね？」

夏希の問いかけに、良夫は夏希から目を逸らし頷かないでいる。

「今朝、あんたが働いている印刷工場に電話で、昨日、あんたが来たかどうか確かめたんだ。そしたら、和田さんは来ていませんよ。明日まで休暇届を出しています、って言っていたんだ」

良夫はじっと見つめる夏希。

「主人はそんなことしていません」

突然、雅美が瞳を潤ませて言った。

「そうよ。私は良夫に人を殺すように教育した覚えはありません」
悦子はきっぱりと夏希に言った。

「いくら、真面目な人間に育てたといっても、人を殺さないとは限らない。何かのきっかけで、なんでもない理由で、人を殺害してしまうときだってあるんだ」

夏希は二人に向かって言う。

「人を殺した後で私と普通に会えるわけじゃない。主人は隠し事が出来ない男性なんです。出会って四年、ずっと主人だけを見ているんで、何もかも知っているんです」

良夫を信用しているのか、良夫が犯人だと思いたくないのか、雅美の口からは叫びにも似た声が出た。

「確かにあんた達はお互いに想い合っている事はよくわかっている。でも、雅美さん、あんたは良夫さんの過去は知らないはずだ。良夫

さんと市田は付き合っていた。そうだろう？ 良夫さん」

夏希は良夫と雅美を諭すように言う。

「あなたは間違っている。主人は何もしてない。だって、主人は…」

「…もういいんだ…」

良夫はボソッと呟くように雅美の言っていることを遮った。

「あなた…」

雅美は不安な表情を良夫に向けた。

「良夫、先生を殺したの!？」

悦子は良夫の腕を激しく掴んで聞いた。

「ああ：僕がマリンを殺したんだ」

「どうして!？」

悦子は狂いそうになるのを抑えて良夫に聞いた。

「僕は大学三回生から雅美と知り合う一年前まで付き合っていた。

二年程の付き合いだったんだ。別れた理由は、マリンの強情な性格に嫌気がさしたから。僕から一方的に別れを告げ、別れるのが嫌だとすがり泣くマリンを振り切り、アパートからマンションに引っ越した。そして、あの日、山上達がこの山荘に来た日、マリンと偶然再会した。赤谷さんの言うとおり、マリンから呼び出されたんです。前から持っていた青酸カリを持っていき、マリンを殺害したんです」

良夫は静かな口調で全てを語った。

「先輩、なんでなんです？ なんで市田先生を殺す必要があったんですか？」

哲平は良夫とマリンが付き合っていた事に驚いた反面、なぜマリンを殺害する必要性があったのかわからないでいた。

「マリンに呼び出されて部屋で、奥さんと別れて私と結婚してよ。じゃないと、昔私と付き合っていた事を奥さんにバラすわよ、って言われて…。僕は雅美との生活を守りたかった。このままいけば、いつまでもマリンが付きまってくる。そう思って…」

良夫は両手を強く握り締めて答えた。

「先生とはどこで知り合ったの？」

雅美は声を震わせながら良夫に聞いた。

良夫とマリンがどこで知り合い、どういう付き合い方をしていたか気になっているようだ。

「僕の大学の学園祭に友達と来たマリンに一目惚れをして、友達からでもいいから付き合ってくれて言っただ。最初に頃はすごく楽しかった。だけど、だんだんと強情な性格が見えてきて…」

「それで別れたってわけね」

雅美は納得したような表情をした。

「もう少しマリンの強情な性格をわかってやって、全て受け止めてやってたら…。マリンと出会って付き合っていなければ…。こんなことにはならなかったのかもしれないな」

良夫は殺人で染まってしまった両手を見て言った。

「市田と出会って付き合った事も人生だ。何かの縁で出会った人達なんだ。それを出会わなければ良かった、なんて酷すぎるんじゃないかな。出会った人達から学ぶことだってあるんだからさ」

夏希はいつになく優しい口調で良夫に言った。

「そうだな。僕は何か勘違いしていたみたいだな」

ため息まじりで呟くように言った良夫。

「さあ、行こう」

吉田警部は良夫の背中を押して、瀬川警部と村木巡査長と共に菖蒲の部屋を出て行った。

悦子と雅美の心の中にショックな想いを抱えながら…。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5200z/>

課外授業殺人事件

2012年1月13日07時45分発行